ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

News letter

NO.22 MARCH 2009

神領10号墳　埋葬施設（石棺）

神領10号墳発掘調査３　－大隅のフィールド調査－

2008年８月下旬から10月中旬にかけて、総合研究博物館　橋本達也は大隅半島の鹿児島県曽於郡大崎町神領10号墳において第３次発掘調査を行いました。

これまでに紹介してきました2006・2007年度の調査に引き続き、今年度も新たに大きな成果が得られましたので、概要をご紹介いたします。今回の最大の成果は前方後円墳における埋葬施設を明らかにしたことです。ここでは大きな岩石をくり抜いて造った石棺が埋葬施設に採用されていました。また、盗掘によって大部分は壊されていましたが、一部に埋葬時の原位置を保ったままの副葬品も出土しました。

1　神領10号墳の発掘調査

大隅の古墳　神領（じんりょう）10号墳の発掘調査の意義については、News Letter No.15・19ですでに紹介をしてきましたので、くり返しになりますが、簡単に振り返っておきます。

日本列島の３世紀半ばから６世紀末までの古墳時代には古墳というお墓を造ることで有力者たちの身分や勢力などの社会的関係を表した時代だと考えられています。また前方後円墳を中心とする古墳は鹿児島から岩手まで分布し、全国的な結びつき、社会的な秩序が形成される過程を表すものだと考えられています。

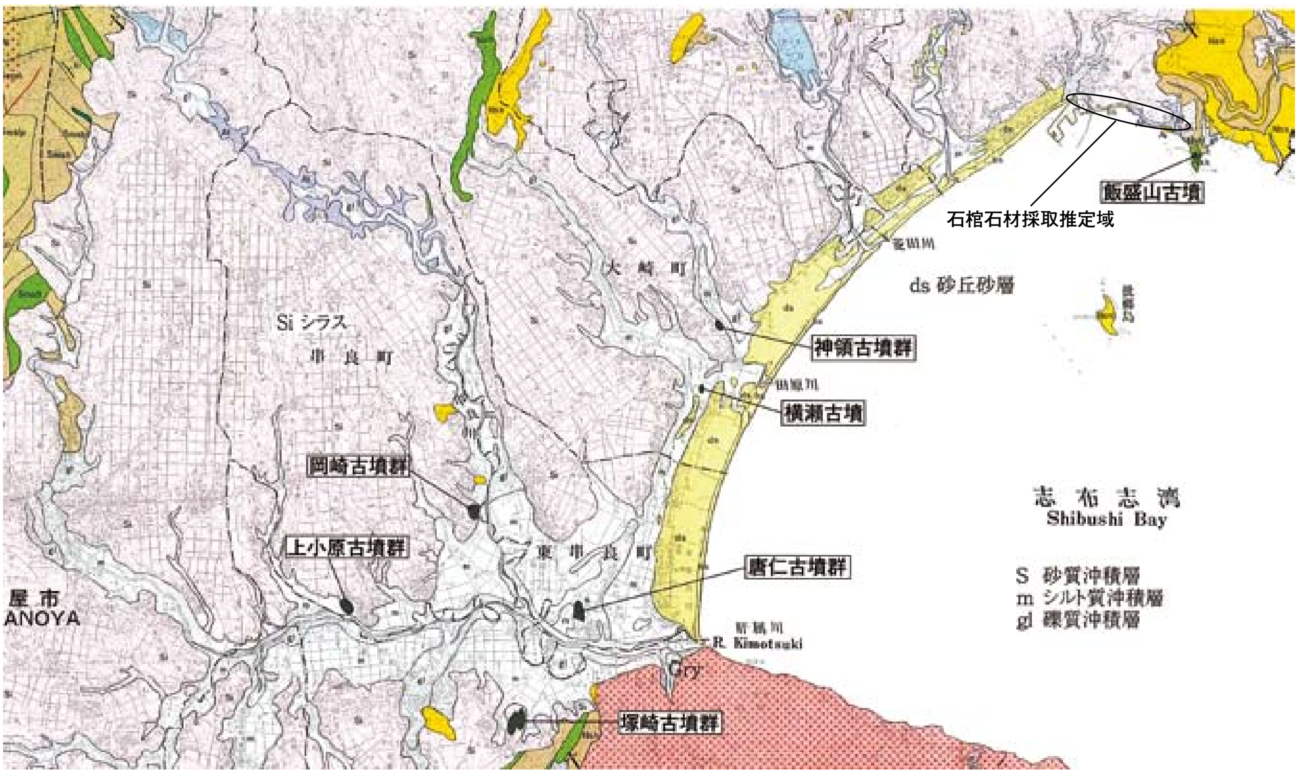
鹿児島県大隅半島の肝属（きもつき）平野周辺域は前方後円墳が造られた最南端の地域です。ここではおおよそ1500年ほど前の前方後円墳を含む古墳がたくさん存在しています。このことから、この地域は各地域において古墳を造ることにはどのような意義があったのかを考える重要なフィールドなのです。それは、日本列島において古代国家としてのまとまりができあがる過程や国家領域の形成といった、日本という国がどのようにできたのかを知ることにつながります。

このような問題意識をもって、総合研究博物館・橋本は科学研究費補助金 若手研究Aの採択を得て、すでに2006・2007年度の二次に渡ってこの古墳の発掘調査を実施してきました。今回は第３次調査になります。

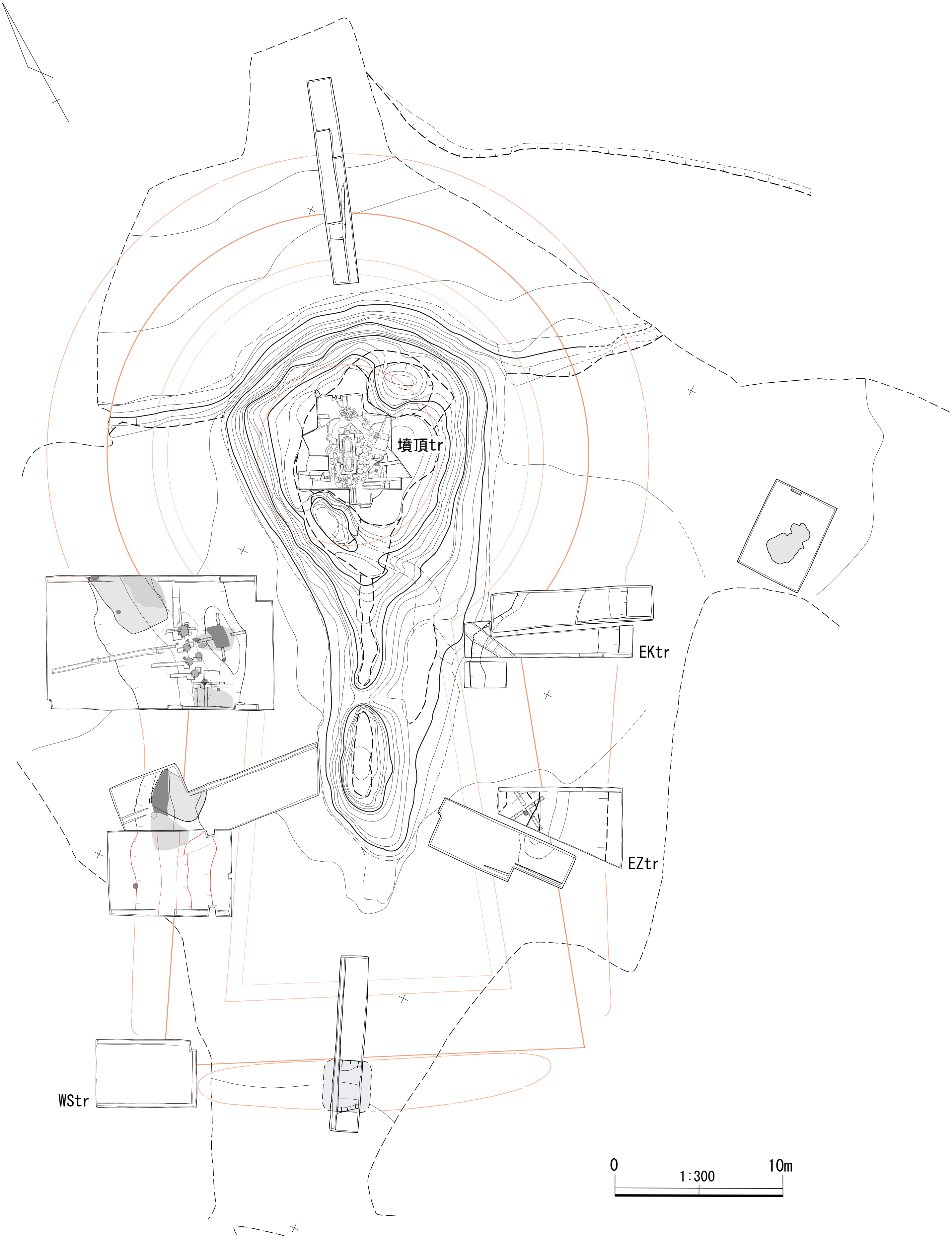
神領10号墳の概要　神領古墳群ではこれまでに同じ台地上に前方後円墳４基、円墳９基、地下式横穴墓８基が知られていました。しかし、その実態はよくわかっていなかったため、古墳群の中で中心的な存在だとみられる10号墳の実体解明を目指して2006年度から調査を進めてきました。

これまでには、主として古墳の規模と形を確認するための調査と墓としての中心である埋葬施設を確認するための調査を進めています。そして古墳の周囲には溝が巡り区画すること、全長約50mの前方後円墳であることが判明しています。また、地中レーダー探査と発掘調査によって周囲には４基の地下式横穴墓が確認されています。あわせて、これまでに眉庇付冑（まびさしつきかぶと）を被った盾持ち人埴輪、初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が出土しています。埋葬施設についてはこれから後で詳しく触れます。

これまでの出土資料から神領10号墳は古墳時代中期中葉、５世紀前半に位置づけられることがわかっています。また、すぐ近くにある全長約140mの大型前方後円墳、横瀬古墳と同時期に位置づけられます。神領10号墳に埋葬された人物はこの地域で横瀬古墳に埋葬された人物に次ぐ地位にあったと考えてよいでしょう。



肝属平野周辺域の地形・地質と古墳群の分布
（鹿児島県発行『鹿児島県地形図⑶大隅半島』より作成）



神領10号墳　調査区全体図

２　神領10号墳2008年の調査

これまで、2006年の第１次調査、2007年の第２次調査ともに古墳の後円部墳頂（墳頂トレンチ）で埋葬施設の構造を明らかにするための調査を行っていました。そして、第２次調査では乱掘によって破壊された石棺の蓋石を確認し、この古墳の埋葬施設に刳抜式（くりぬきしき）石棺が用いられていることまでは明らかになっていました。同時に掻き乱された攪乱（かくらん）土の中に鉄製甲冑の破片、鉄板に金メッキをした銅板を貼り付けた鉄地金銅装の金具が存在することもわかっていました。しかし、埋葬施設の全体像は明らかにできておらず、第２次調査で掘り下げた部分よりもさらに下にも石棺の埋まっている可能性が考えられたため、あらためて2008年８月下旬～10月中旬にかけて第３次の発掘調査を実施しました。

石棺の蓋石が壊された状況

加えて、第３次調査では墳丘東側のクビレ部と東側前方部側面の構造、西側の前方部前端コーナー部を確認するために３ヶ所の調査を行いました。西側のクビレ部では第２次調査で大量の土器を用いた祭祀空間が確認されていますので、東側クビレ部でも墳丘の構造を明らかにしつつ、なんらかの施設がないかを確認するための調査を行いました（EKtr）。また、前方部東側面では第１次調査の際に行った地中レーダー探査で地下式横穴墓とみられる反応があった付近を発掘したのですが、そのときには地下式横穴墓の入り口にあたる竪坑が確認できませんでした。あらためて、前方部東側の構造を明らかにするとともに、地下式横穴墓の竪坑を探す目的で調査区を設定しました（EZtr）。そして、墳丘構造を確定するために前方部コーナーの確認を目的としましたが、東側コーナーは藪がひどく調査ができなかったため、西側コーナーの検出を目指して調査区を設定しました（WStr）。

石棺棺身

（1）　埋葬施設の構造

発掘調査の結果、後円部墳頂で刳抜式舟形石棺を石で覆った埋葬施設を確認しました。また、棺外東側に副葬品を並べた施設が確認できました。

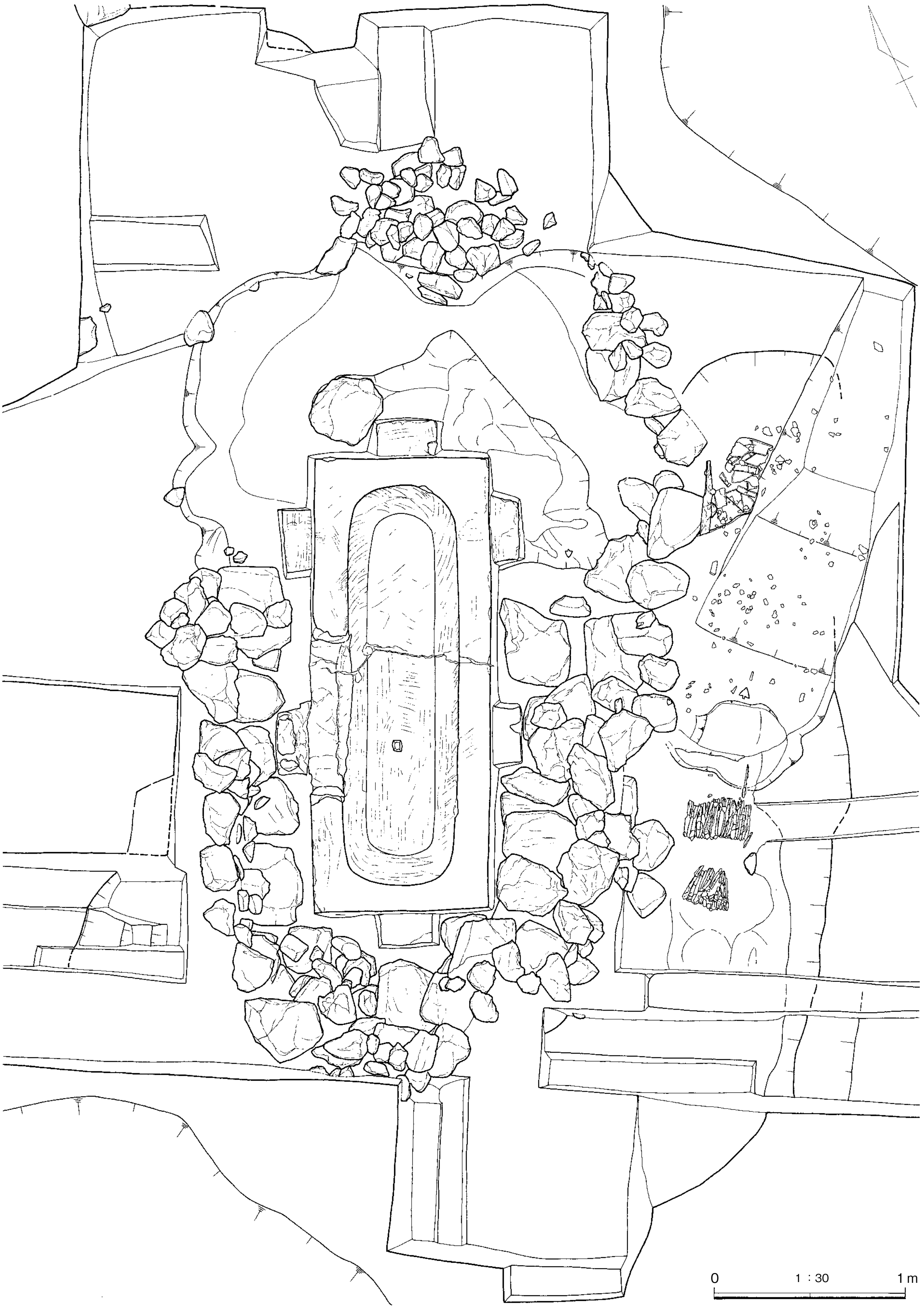
石　　棺　舟形石棺は棺蓋と棺身の２石を大きな岩石を刳り抜いて造ったものです。棺蓋はこの種の舟形石棺としては珍しく平坦に造られ、あまり丸くありません。ただし、破壊されて破片となっており、本来の形態の1/3程度しか出土していません。

石棺加工痕１

石棺の棺身は長方形の本体に長辺に２個ずつ、短辺に各１個、計６個の縄掛け突起と呼ぶ突起があります。突起を含む最大長は277cm、最大幅128cmで、本体の長さは242cm、幅97cmです。棺底部は船底のように丸くなっており、棺身の高さは約40cmを測ります。このことから、この石棺を造るためには少なくとも長さ280cm、幅130cm、高さ40cm以上の大きな岩石が必要だと考えられます。人体を収める刳り込みの平面形は小判型で、丸くきれいに削り込まれています。下部ではちょうど人が収まるサイズです。重さは量れませんが、他の参考資料からみると棺蓋・身ともに２～３tあるのではないかと考えられます。

石棺加工痕２

内部は完全に盗掘されており、土が流入していました。副葬品では小さくて取りこぼしたとみられる管玉（くだたま）が出土したのみです。棺身・棺蓋とも内面にはベンガラとみられる赤色顔料を塗っていました。棺内底部付近では朱とみられる顔料も出土しています。石棺は面とカーブを取り混ぜて、平滑に削り仕上げており、加工の痕跡も随所に残っています。この種の石棺としては仕上げがきわめて丁寧です。



墳頂トレンチ　埋葬施設全体平面図

埋葬施設（東から）

副葬品列（北から）

石棺北西部断ち割り（北から）

礫　槨　第１次調査・第２次調査でたくさん出土したものの正体が不明であった軽石は石棺を覆うものであることが判明しました。石棺を取り囲んでいるので、はじめは石室の壁を構築するものかとも考えましたが、石は積み重ねられてはおらず、土と石とで石棺を覆う礫槨といえるような構造だったと考えています。

また、棺身を取り囲む石材は比較的大きめで四角いものが使われており、加工痕をもつようなものが含まれ丁寧に並べられているようです。一方で、棺蓋の外側に対応する位置にある石材は、それよりも一回り小さく丸めの石材を用いており、また石材もやや疎らです。棺身の外側に並べられたものと棺蓋を覆うものは同じ石材を用いていますが、その大きさや扱いには差がみられます。

同じく軽石の中で、北小口の外側には趣の異なるこぶし大くらいの小礫群があります。高い位置に残っており、本来は棺を礫群で覆って埋めた後、最後に小礫で上を覆ったものではないかと考えています。

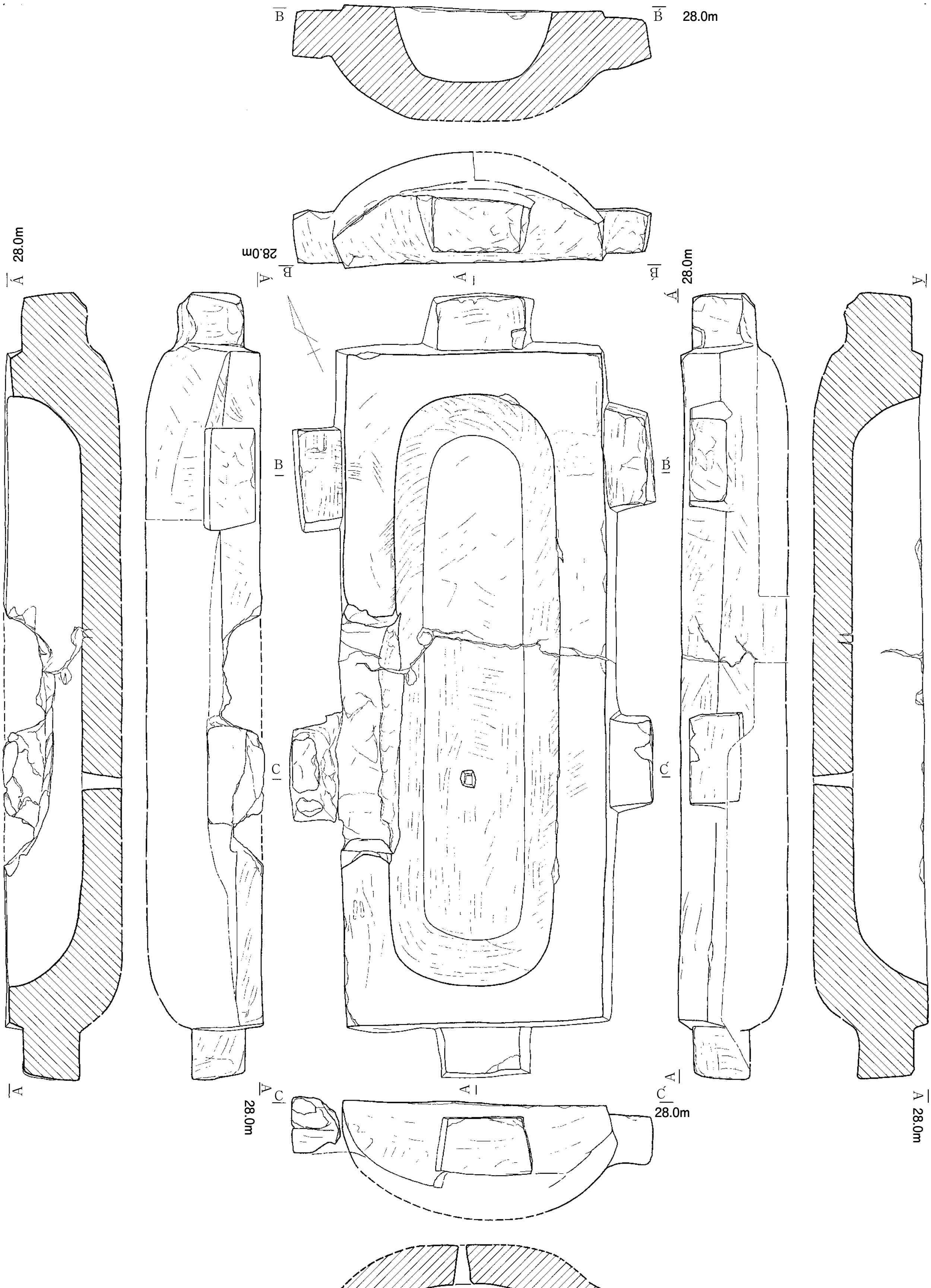
副葬品列　礫槨の東側には、副葬品を並べおいた場所が確認されました。ただし、残念ながらその中央部が大きく攪乱されて壊されていました。それでも幸いなことにその両端には鉄剣、鉄製のヨロイ＝短甲、鉄のやじり＝鉄鏃が残っていました。また、周辺からは小さな破片となって散乱した状況で、さまざまな副葬品が出土しています。具体的な品名については次節で述べます。

副葬品は石棺東側のややくぼんだところに直接並べられたもので、箱などには収められていなかったと考えられます。それは、短甲と鉄鏃では出土している高さが異なり、床面が平らでないことなどからわかります。また、鉄剣が石材の上にのっており、鉄鏃のすぐ脇にも石材がありますし、短甲がやや傾斜して置かれていることもそれを示唆します。

墓　壙　盛土を観察すると、まず埋葬施設の構築には墳丘の造成過程で石棺の棺身が収まるくらいの深さのある穴を造っていることがわかります。この中に最初に棺身が設置され、その周囲に軽石が置かれたものと考えられます。この穴を墓壙といいますが、墓壙には前方部側の壁がなく、開いていたようです。石棺の設置方法を考えると、棺は前方部側から墳丘上に上げて、後円部の墓壙に引き込んだものと考えてよさそうです。

棺身を設置し、棺身の外側周囲に大きく平たい軽石を設置した後に、この段階で亡き主人の埋葬が行われます。そして、棺内とともに棺外にも副葬品が並べられます。埋葬・副葬時にはそれに伴う儀礼行為などが行われたと思われますが、その後は蓋石をのせて、さらに丸めの軽石をのせて行きます。なお、盛土の状況から墓壙の壁は棺身の高さまでしかありません。棺蓋を設置して以降、埋葬施設の埋め戻しは墳丘の造成と一体で行われたものと考えられます。

現状で古墳の墳頂はずいぶん壊されているために本来の高さがどれくらいであったかは不明ですが、さらに数mは盛土されて高かったと考えられます。また、攪乱された土の中から埴輪や土師器の破片が出土しており、墳頂部でもその上部には埴輪が並べられ、土器を用いた祭祀が行われたものと考えられます。



石棺図

短甲（後胴）・鉄剣

短甲（前胴）

鉄鏃束

胡籙

鉄鏃

胡籙の金メッキの拡大

(2)　副葬品

石棺の中からは、盗掘で取り残したと見られる管玉しか出土しませんでした。管玉は計７点出土しています。本来ここにどのようなものが副葬されていたかは明らかではありませんが、攪乱土の中から勾玉が２点出土しています。これは石棺内に副葬されたものでしょう。その勾玉の１つには刀剣類とみられる鉄製品がさび付いています。ですので、棺内に刀剣があったことも推察できます。

棺外副葬では鉄剣・短甲・鉄鏃が元の位置のわかる状態で出土しました。鉄鏃の束２列はほぼ壊れずにそのまま出土しましたが、鉄剣は鋒(きっさき)側のおそらく1/3程度は欠損しています。短甲は全体の1/3程度が残っていますが、残りは攪乱によって壊されていました。

攪乱土の中には、衝角付冑(しょうかくつきかぶと)というカブト、胸と首付近を護る頸甲(あかべよろい)、肩甲(かたよろい)などの破片のほか、籠手(こて)とみられる破片があります。また、短甲と冑はもう一組ある可能性が高く、現在検討中です。

甲冑以外では、胡籙(ころく)という矢を入れる矢筒、これは鉄地金銅製というつくりで、鉄板に金メッキをした銅板を貼り付けて装飾しています。その他は小片となっているために、現在検討中ですが馬具の一部の可能性があるものなども出土しています。

少し詳しく見てみましょう。短甲は三角板革綴(かわとじ)短甲という型式のものです。冑には三角板革綴衝角付冑の破片が存在しています。これらは甲と冑のフレームの中を三角形の板で埋め、革紐で綴じ合わせたものです。主に神領10号墳の時期よりも、数十年くらい古い時期に生産されていたと考えられるもので、初期須恵器や胡籙などといった同時期の最新の文物をもっている一方で、少し古めかしいものです。この古墳が造られた５世紀を中心とする時代、甲冑は近畿の大型前方後円墳などを造っていた当時の政権中枢部で生産され、各地の有力首長層に配布されたもので、近畿の中央政権と地域首長との政治的な結びつきを表すものだと考えられています。

すなわち、神領10号墳に葬られた人物が近畿の大型前方後円墳に葬られた人々と結びつきをもったことを表しています。古墳時代において甲冑は男性に伴う器物であることがこれまでの研究で明らかになっています。神領10号墳では古い型式の甲冑をもつことは、その埋葬されている人物が長命な男性であったのかも知れません。

また、詳細は現在、検討中ですが破片資料の中には革紐での綴じ合わせではなく、鋲で留め合わせた鉄板があります。これは５世紀前半に新たに鋲留(びょうどめ)技法という朝鮮半島系の金工技術を導入してつくられた鋲留短甲の破片である可能性があります。冑には金銅装の眉庇付冑という金の装飾をもつものがあるようで、この古墳には甲冑が２組あるようです。金で装飾された冑を含む２組の甲冑、それもまたこの古墳埋葬者の地位の高さを表すものです。

胡籙は矢を腰に下げる道具で、神領10号墳の時代より少し前くらいに朝鮮半島からもたらされた新たな文物です。ここでの出土資料も朝鮮半島系の文物です。破片になっており、鉄の部分がさびて、また銅はもろくなっていますが、金は腐食しないので部分的にその輝きを確認することが可能です。

原位置を保って出土した鉄鏃には胡籙が伴っていません。また、胡籙の破片は攪乱土の中から出土しており、攪乱土中からも鉄鏃の

破片が出土していますので、鉄鏃の束は少なくとも本来３つ以上あり、その一つに胡簶が伴っていたものの、それは攪乱で破壊されてしまったということだと思います。なお、鉄鏃にもいくつかの型式が含まれており、バリエーションがあります。

(3)　墳丘の調査

今回の調査では、墳丘の東側クビレ部、前方部側面、西側前方部前端コーナーにも調査区をもうけました。

東側クビレ部（EKtr）では埴輪が出土しましたが、古墳の墳丘側から流れ込んだような状況で、本来の位置などを特定できる状況ではありませんでした。またクビレ部のちょうど屈曲部には太平洋戦争時の塹壕とみられる掘り込みがあり一部壊されていました。ただし、ここでは西側クビレ部の状況とは異なり、祭祀などは行われなかったと考えられます。

東側前方部側面（EZtr）では墳丘裾部分で土師器壺が出土しました。しかし、本来この部分にあると考えていた地下式横穴墓の竪坑は確認できませんでした。墳端部の周溝は緩やかなくぼみで、明瞭な輪郭をもつ溝にはなっていません。また、クビレ部と比べると浅くなっており、周溝は前方部の前端に向かうに従って浅くなりつつ、掘り込みも不明瞭になるものと考えられます。

西側前方部前端コーナー（WKtr）では掘り込みなどは確認できませんでした。これまでの調査からみて前方部のコーナーであることは間違いない位置と考えられるのですが、とくに溝などはありません。これは東側の状況からも周溝が前方部前端に向かって浅くなっていくことと、関係するものと思われます。前方部前端、とくにコーナー付近には掘り込みをもたないようです。前方部正面はわずかにくぼんでいることを第１次調査で確認していますが､前方部正面付近の区画は不明瞭になるようです。これは、九州南部の前方後円墳に特徴的にみられる形態で、４世紀代から認められる後円部を重視した古墳構造の系譜にあるものと考えられます。

東側クビレ部

東側前方部側面

西側前方部コーナー

３　まとめとこれから

News Letter No.19でもすでに紹介していたのですが、この種の舟形石棺は大分県の臼杵地域や宮崎県の延岡地域などでも古墳の埋葬施設として用いられていることが知られています。あらためて、調査を終えてみて、神領10号墳出土石棺の形態的な特徴は延岡地域の石棺との関係があると思います。

古墳時代には石棺が生産地から長距離運搬される事例のあることが良く知られています。そのことから、調査時までは神領10号墳の石棺は延岡地域から運ばれてきたものの可能性を考えており、No.19ではそう書きました。ところが、研究者の中から石材の特徴が延岡のものとは違うのではないかという指摘がありました。

そこで、あらためて検討したところ、どうもこの石材は入戸火砕流（いとかさいりゅう）の溶結部、すなわち鹿児島湾北部を火口とする姶良カルデラの噴出物であるということがわかってきました。そして、実は入戸火砕流の溶結凝灰岩の分布は当鹿児島大学総合研究博物館の大木公彦館長が早くに調査しており、同様のものは志布志市の沿岸部付近で採取できる可能性が高いということです。

延岡地域には石棺を製造する技術を持った石工がいて多くの石棺を造っています。しかし、鹿児島の肝属平野周辺域には石棺を造る伝統はありません。すなわち、この石棺はおそらく延岡地域の石工が招請され、志布志沿岸で石材を選び、造り出したものだと考えるのが妥当です。

延岡市小野石棺
（宮崎県立総合博物館）

延岡から石工達を呼び、大きな船で重い石棺を古墳近くの港まで運び、台地の上の古墳のまで引っ張り上げる一大事業です。石棺だけにでも相当な労力と歳月を投じたと考えられます。この古墳に葬られた人物の力量の一端を指し示すものであることは間違いありません。

神領10号墳では墳丘各所の調査で埴輪、初期須恵器、土師器といった資料が出土しました。今回の調査では、石棺とともに各種副葬品が見つかりました。これらはいずれも古墳時代の研究の上で鍵になる資料です。それが、一つの古墳でそろって出土しました。神領10号墳は今後、単に古墳時代の南限の前方後円墳ということだけでなく、古墳研究の代表的な存在になることは間違いないと思います。

2006年から３カ年にわたって実施してきた神領10号墳の発掘調査もこれでひとまず終了です。前方後円墳と地下式横穴墓の関係などまだ、調査すべき課題は多く、すべてを調査しきったということではありませんが、これまで不明であった鹿児島における前方後円墳の実態を明らかにするという当初の目的はおおむね達成できたものと考えています。この間、きわめて多くの方々からご支援いただき、交通の不便なところであるにもかかわらずたくさんの方々に足を運んでいただきました。今後はこの成果をまとめ、より詳細な報告に向けて作業を進めて行きます。

橋本　達也

2009年度のイベント予定　詳細は随時、追って広報いたします

第９回　公開講座「東南アジアの稲作と農耕文化」
2009年５月30日（土）　13：30～16：00　鹿児島大学郡元キャンパス　総合教育研究棟２F　入場無料
田中耕司（京都大学地域研究統合情報センター所長）

第16回　市民講座「カンボジアの自然」
2009年７月11日（土）　13：30～16：00　鹿児島大学郡元キャンパス　総合教育研究棟２F　入場無料
塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター）「カンボジアのトンレサップ湖―アンコール文明をはぐくんだ湖―」
荒木祐二（東京大学アジア生物資源環境研究センター）「湖に沈む森のしくみと人のかかわり」
本村浩之（鹿児島大学総合研究博物館）「巨大湖にくらす魚の不思議」

第９回　自然体験ツアー「君も今日からアリ博士」
2009年７月18日（土）　日置市伊集院町城山公園
山根正氣（鹿児島大学理学部）・原田　豊（池田高校）
対象：小学４年生以上　参加費：一般1000円・高校生以下500円　30名

第14回　研究交流会「ジオパークとフィールドミュージアム（仮）」
日時未定　追って広報いたします。　入場無料

第10回　特別展「小さなアリの大きな世界」
2009年11月４日（水）～12月８日（火）　10：00～17：00　日曜日を除く全日開催
鹿児島大学郡元キャンパス　総合教育研究棟２F　プレゼンテーションホール　入場無料

第17回　市民講座「アリの目から見た世界（仮）」
2009年11月14日　鹿児島大学郡元キャンパス　総合教育研究棟２F　入場無料
栗林　慧（昆虫写真家）

鹿児島大学総合研究博物館　News Letter No.22
■発行/2009年3月31日　■編集・発行/鹿児島大学総合研究博物館　〒890-0065　鹿児島市郡元1-21-30
TEL：099-285-8141　FAX：099-285-7267
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/